

久留米城下町遺跡

(原古賀町)

—第21次発掘調査報告—



平成25(2013)年3月

久留米市教育委員会

序

久留米市は、筑紫平野の中心に位置し、古くから水路と陸路の要衝としての位置を占めてきました。このため市内には、先人達の残した多くの文化遺産が存在します。江戸時代には、久留米城は有馬氏の居城となり、久留米は21万石の城下町として栄えました。

今回の調査では、江戸時代の原古賀町の町屋遺構を発見しました。柳川往還沿いの繁華街の賑わいが伝わってくるようです。

この成果を活かして、今後の久留米市の市民文化や、教育の発展、さらには地域経済の活性化に貢献できることを願っております。また、発掘調査に際して多大なご協力をいただきました株式会社住まいのハウリーをはじめ、周辺住民の皆様にご心より御礼申し上げます。

平成25年3月31日

久留米市教育委員会
教育長 堤 正則

例言

1. 本書は、駐車場建設に先立ち、平成24年度に株式会社住まいのハウリーの委託を受けて実施した、久留米城下町遺跡第21次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は久留米市教育委員会が調査主体となり、市民文化部文化財保護課の江頭俊介が担当した。本書に掲載した遺構実測図の作成は、江頭と森啓恵、塚本明美が行い、浄書は江頭と古賀和子が行った。
3. 遺構写真は、江頭が撮影した。遺物写真撮影は久留米市埋蔵文化財センターにおいて、塚本映子が行った。なお、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
4. 遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）を基に作成し、図面の方位は座標北を示す。
5. 本書に使用した遺構の略記号は、SB－掘立柱建物、SD－溝、SK－土坑、SX－その他の遺構を示す。
6. 出土遺物・記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管されている。
7. 本調査の略記号はLKM－021、調査番号は201217である。
8. 本書の執筆・編集は江頭が行った。

本文目次

I. 緒言	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	4
IV. 総括	12

I. 緒言

1. 調査に至る経過

本調査は、駐車場建設に伴う事前の発掘調査である。平成23年1月17日、地権者の株式会社住まいのハウリーから、久留米市本町186-1、187-3、188-1、188-2、189における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地一帯は、周知の遺跡である久留米城下町遺跡内にあたり、今回の調査地においても、江戸時代の町屋に伴う遺構が残存している可能性があると考えられたため、同年2月4日発掘調査が必要である旨回答した。翌平成24年5月9日、地権者である株式会社住まいのハウリーより、発掘調査の依頼が提出され、それを受けて同年7月11日久留米城下町遺跡第21次調査の委託契約を締結した。同年7月18日より、発掘調査を開始し、同年8月7日に発掘調査を終了した。その後平成25年3月31日まで整理作業と報告書の作成を行った。

2. 調査の体制

調査主体：久留米市教育委員会

調査総括：市民文化部

文化財保護課

教 育 長：堤 正則

部 長：辻 文孝

次 長：佐藤 光義

課 長：古賀 正美

課長補佐兼課主査：宮崎 俊一

課長補佐：園井 正隆

課 主 査：白木 守、辻 義則

庶務担当：豊福 早苗

調査担当：江頭 俊介

整理担当：古賀 和子、中里由佳絵

発掘調査臨時職員

秋吉 力、合戸 喬一、勝田 美代子、蒲池 稔、塚本 明美、津留崎 利子、原口 貞子

細江 チヅ子、森 啓恵

発掘調査整理臨時職員

小本 美沙子

3. 調査の目的と経過

調査地は現在の本町字七丁目に所在する。柳川往還沿いの町屋の状況を確認することを目的とした調査である。平成24年7月18日、重機による表土剥ぎを行った。地表下0.7m程は近現代の整地層であり、その下に褐色粘質土層の遺構面が検出された。各遺構の調査・記録を行い、平成24年8月3日に高所作業車による調査区全体の写真撮影を行った。8月7日に埋め戻しを行い、発掘調査を完了した。遺構実測はトータル・ステーションで行い、「遺構くんCubic」で編集した。記録写真は、カラーリバーサル・モノクロ6×7判で撮影した。翌平成25年3月31日までは、遺物整理と報告書作成を行った。

II. 位置と環境

久留米市は、九州の北部、筑後川の中流域にあたり、筑紫平野の中心に位置する。古代においては筑後国府や国分寺が置かれ、筑後地区の政治・経済・文化・宗教の中心を占めた。近世には、毛利氏、田中氏の代を経て、有馬氏二十一万石の城下町として栄えた。近代は軍都として、また繊維産業とゴム産業の街として栄え、現在まで県南の中核都市として発展している。

本調査区周辺は、高良山から筑後川に向かって緩やかに延びる洪積台地の末端近くにあり、標高はおおよそ11m程である。本調査区周辺は洪積台地を開削し筑後川に注ぐ小河川が多く、本調査区より西側の梅満町一帯は、これら小河川が集まる低湿地をなしている。

本調査区周辺に残る人間活動の痕跡としては、縄文時代のものが最も古い。山ノ内遺跡や庄屋野遺跡では、落とし穴遺構が検出されており、このあたり一帯が狩り場として利用されていたことがわかる。弥生時代には宮ノ木遺跡で後期の井戸、土坑、溝などが検出されており、居住域として利用され始めたことがわかる。古墳時代には田中遺跡・津福西小路遺跡・津福古賀畑遺跡一帯の広い範囲で集落が営まれるようになる。古代においては三潯郡島養郷に含まれる。本調査区周辺において古代の建物遺構の検出は少なく、白山遺跡や中原遺跡でわずかに見られる程度である。中世においては、大隈氏の居館や村落等が存在したようである。現在に至る久留米城下町の基礎が形成されたのは、関ヶ原の戦いの功で田中吉政が筑後国主となってからである。本城となる柳川城と支城の久留米城を直線的な道路（柳川往還）で結び、目安町や、本調査区に近い津福町などの街道町が整備された。次男忠政が入城した久留米城の膝元では、久留米と柳川を結ぶ街道と、肥前から府中駅とを結ぶ街道が縦横に交わっており、この二本の道路を基軸とした城下町が形成されていたようである。また、街道からやや城に近い位置にも内町や元町といった町屋が立ち並んでいた。



第1図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

田中氏は二代忠政の後嗣子が無く断絶し、9ヶ月ほど幕府の預かるところとなったのち、有馬豊氏が1621年に筑後北半国21万石の領主として久留米城に入城した。有馬氏は元町や京町の町人を退去させ、外郭、京限侍屋敷を建設した。このほか庄島や櫛原にも侍屋敷を建設し、城下の東端には寺を集住させ、寺町を建設した。府中へ向かう長町（のちの通町）は以前四丁目までであったのが、順次東側へ拡大していった。前代から柳川往還の起点であった三本松町の南側には原古賀町が南に延びていき、『石原家記』の寛文九年（1669）条には「原古賀町家三丁目より下も新町段々出来、津福屋たたら野の中にこれ有り候処段々町続きに成る」と記されており、原古賀町と津福町の間にも町屋が形成されていったことがわかる。延寶八年図（1680）では原古賀町は五丁目までである。その後、田代火事と呼ばれる享保11年（1726）の大火の際には、被災した両替町の町人が移住させられ、原古賀町七丁目が形成されている。また、文政年間には原古賀出町が戸板屋町別当区に入っているため、このころには出町が成立していたと見られる。原古賀町七丁目と出町の間には、苧汲川が引き込まれて境を成している。おそらく七丁目が形成された当初はここに何らかの関があったと思われる。そののち出町の南端には構口が造られた。本調査区は、構口の外側にあたり、柳川往還の札の辻である。近世においては久留米城下の出入り口として、物資の輸送や集積、人馬の休憩や供給拠点といった機能を有している地域であったと見られる。



第2図 城下町復元図（○は調査地）



第3図 久留米城下町遺跡第21次調査区位置図（1/2,500）

Ⅲ. 調査の記録

1. 検出遺構

今回の調査では近世の掘立柱建物2軒、土坑21基、埋甕2基、漆喰製盤状遺構1基、その他ビットを検出した。

掘立柱建物

SB5 (第4・12図)

調査区中央で検出した桁行3間以上(4.9m以上)、梁間一間以上(2.3m以上)の栗石を伴う礎石立ちの南北棟建物である。桁行の柱間は1.5m～1.9mである。梁行の柱間は2.1m～2.3mである。各柱穴の直径は40～50cm程度である。遺物の出土はないが、より切り合い関係が後出するSK30から明治初期の碗蓋が出土していることから、この建物の時期は明治以降と考えられる。

SB13 (第12図)

SB5の東側で検出した桁行2間以上、梁行不明の根石を伴う南北棟の掘立柱建物である。柱間は1.6m～1.9mである。SD28より後出する。根石を伴う構造から、SB28より古いものと考えられる。

溝

SD28 (第6・7・12図)

調査区中央よりやや北側を東西方向に走行する溝である。軸は東西方向にほぼ正方位で乗っている。幅は1m、検出した長さは10mである。深さは0.3mを測る。各遺構に先行する。遺物は少なく、陶器皿(1)と陶器細片が出土している。断面形状は逆台形を呈する。

SD38 (第6・12図)

調査区北西で検出した幅0.5m、長さ4.5m、深さ0.2mの溝である。南西から北東に向かっている。断面形状は逆台形を呈する。SD28より後出し、根石の入ったビットに切られる。

土坑

SK15 (第12図)

調査区中央南寄りで検出した長辺3m、短辺1.6m以上、深さ40cmの土坑である。SB5、SX2に先行する。断面



第4図 SB5栗石検出状況(北から)



第5図 SB13根石検出状況(西から)



第6図 SD28、SD38完掘状況(西から)



第7図 SD28完掘状況(東から)

形状は半円形を呈する。18 世紀中頃の遺物を含む。

SK19 (第8・12 図)

調査区西側で検出した長辺 2.8m、短辺 1.8m 以上、深さ 0.4m の土坑である。SX1 と SK30 より先行する。上面に焼土の広がりがある。18 世紀前半から 19 世紀前半の遺物を含む。朝妻焼の皿が多く出土している。

SK30 (第8・12 図)

調査区西側で検出した長辺 1.9m、短辺 1.7m、深さ 6.5m の土坑である。SK30 より後出する。明治期の染付碗蓋に「原十赤太」「赤太」「原三木口」と墨書された貧乏徳利などが出土している (20～25)。

埋甕

SX2 (第9・12 図)

調査区南側で検出した直径 0.6m、深さ 0.5m の土坑に土師器甕が埋設された遺構である。上半部は削平されている。SX15 より後出する。掘方から明治期の遺物が出土している。内面に硝石等の付着は無く、定置式の水甕かと思われる。

SX3 (第10・12 図)

調査区東側で検出した直径 1m、深さ 0.5m の土坑の底部に陶器の甕が埋設された遺構である。時期は不明である。

漆喰製盤状遺構

SX1 (第11・12 図)

調査区南西側で検出した直径 0.7m、深さ 5cm のピットに漆喰製の盤が据え付けられている。SK19 より後出する。便槽と考えられる。

出土遺物

今回の調査では 18 世紀前半から明治期の陶磁器、石製品、鉄製品、銅製品などが出土した。特筆すべき遺物としては、20～25 の墨書陶器があげられる。20、22、23、24、25 はすべて「赤太」と墨書されていると見られる。21 は「原三木口」と書かれている。貧乏徳利の底面や磁器皿の底面に書かれている。各遺物の詳細については別表を参照願いたい。



第8図 SK19、SK30完掘状況 (西から)
(19) が出土している。そのほか底部



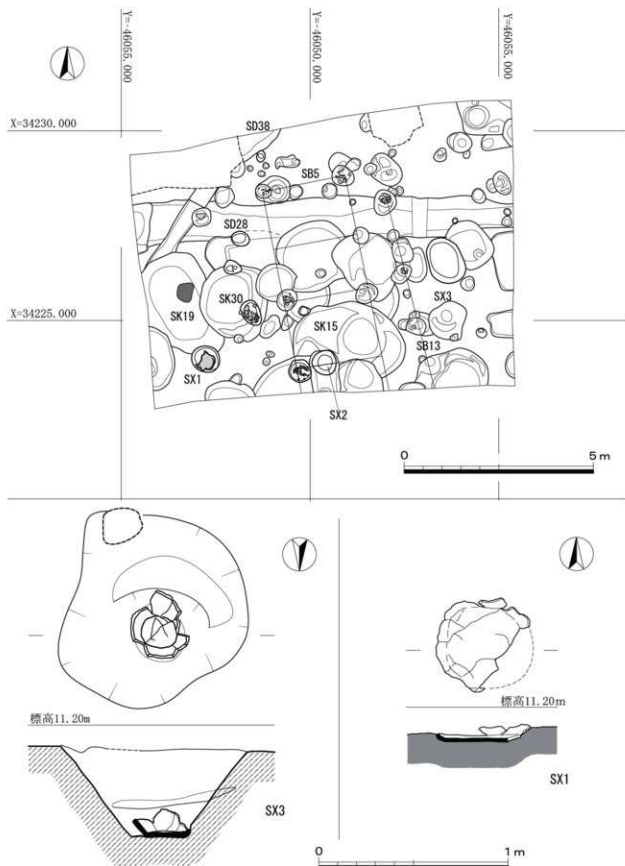
第9図 SX2 甕検出状況 (北から)



第10図 SX3 甕検出状況 (北から)



第11図 SX1 検出状況 (北から)



第12図 調査区遺構配置図 (1/100)、SX3・SX1実測図 (1/20)



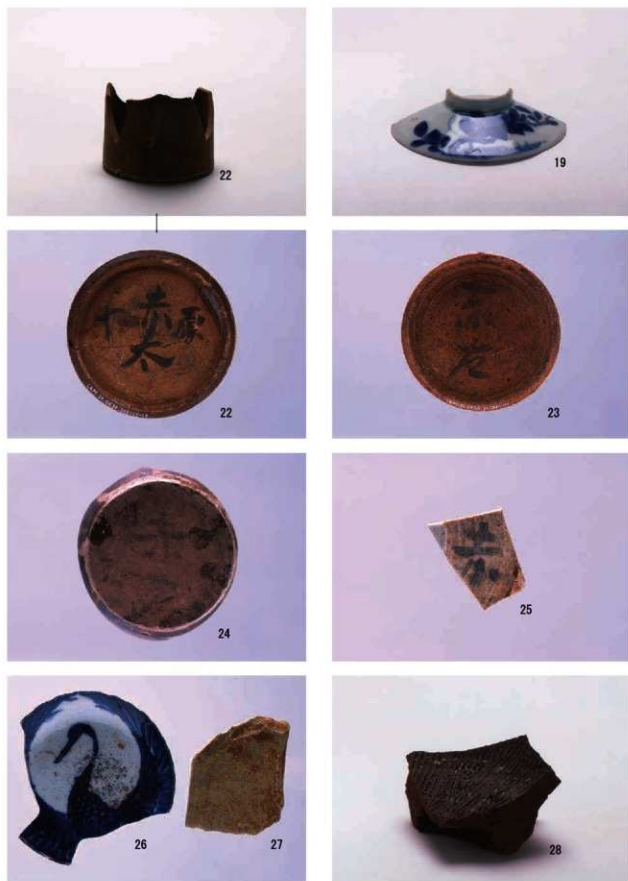
第13図 調査区全景（西から）



第14図 調査区遠景（南から）



第15図 出土遺物写真1



第16図 出土遺物写真2



第17図 出土遺物写真3

第1表 出土遺物観察表

遺物No.	出土遺物	種 別	器 種	法 量			色 調(染付・胎色)		図 型(文様)			加土(製作地)	備 考	登録番号
				口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	外面	内 面	外面	内 面	底面・蓋面 内面底面			
1	S D28	陶器	皿	24.0	10.4	4.5	灰緑・粉緑	-	-	-	-	-		201217-57
2	S K15	磁器	碗	9.8	4.4	5.3	染付	網	網・菊	渦福	肥前	-		201217-10
3	S K15	磁器	碗	10.0	4.2	5.1	染付	草花	-	-	-	-		201217-13
4	S K15	磁器	碗	10.0	4.2	4.9	白磁	-	-	-	砂目	-		201217-12
5	S K15	磁器	碗	10.0	4.0	5.2	染付	網	網・菊	渦福	肥前	-		201217-11
6	S K15	磁器	碗	-	4.1	5.1	色絵	草花	花	-	肥前	-		201217-17
7	S K15	磁器	香炉	9.8	6.5	4.3	青磁	-	-	-	肥前	-		201217-15
8	S K19	磁器	広東碗	11.6	6.4	5.2	染付	山水	團扇・岩波	-	肥前	-		201217-27
9	S K19	磁器	鉢	-	6.6	(3.2)	青磁染付	-	山水	「陶」	肥前	-		201217-46
10	S K19	磁器	中皿	13.6	8.3	3.6	白磁	-	-	三足ハマ・蛇ノ目回	肥前	-		201217-29
11	S K19	磁器	碗	-	3.6	(4.2)	染付	山水	-	「領」	朝麦焼	18c前半		201217-58
12	S K19	磁器	中皿	-	9.0	(2.7)	染付	團扇	山水	-	朝麦焼	18c前半		201217-34
13	S K19	磁器	中皿	-	[9.2]	(2.3)	染付	團扇	山水	-	朝麦焼	18c前半		201217-41
14	S K19	磁器	中皿	[14.0]	[7.6]	4.2	染付	團扇 山水	山水	-	朝麦焼	18c前半		201217-36
15	S K19	磁器	中皿	-	[7.2]	(2.4)	染付	團扇	山水	-	朝麦焼	18c前半		201217-42
16	S K19	磁器	中皿	-	-	(2.3)	染付	團扇	山水	-	朝麦焼	18c前半		201217-38
17	S K19	磁器	中皿	-	[8.4]	(2.3)	染付	團扇	山水	-	朝麦焼	18c前半		201217-37
18	S K19	磁器	碗	[11.0]	5.4	7.3	染付	山水	-	砂目	初瀬伊万里	17c前半		201217-24
19	S K30	磁器	碗蓋	[9.3]	3.3	2.2	染付	鳥 山水	草花	-	肥前	明治		201217-61
20	S K30	磁器	中皿	13.6	8.1	3.8	白磁	-	-	三足ハマ・蛇ノ目回	肥前	輪花・底面墨書「赤太」		201217-63
21	S K30	陶器	賀之徳利	4.8	8.9	20.2	褐釉	-	-	-	-	底面墨書「原三木口」		201217-72
22	S K30	陶器	賀之徳利	-	8.1	(6.3)	灰釉	-	-	-	-	底面墨書「原十赤太」		201217-69
23	S K30	陶器	賀之徳利	-	7.5	(2.6)	褐釉	-	-	-	-	底面墨書「赤太」		201217-71
24	S K30	陶器	賀之徳利	-	6.8	(3.6)	褐釉	-	-	-	-	底面墨書「赤太」		201217-70
25	S K30	磁器	中皿	-	-	(0.9)	染付	-	-	-	-	底面墨書「赤」		201217-76
26	S X 2	磁器	中皿	12.5	6.5	2.6	染付	鶴	-	-	-	コバルト・明治		201217-3
27	S X 2	石製品	砥石	6.5	6.7	1.7	灰褐色	-	-	-	-	-		201217-4
28	S X 3	陶器	磁鉢	-	[10.0]	(5.0)	褐釉	-	-	-	-	-		201217-6
29	S X 1	磁器	戸車	[2.6]	-	1.0	白磁	-	-	-	-	-		201217-1
30	S X 2	土師器	大甕	-	25.5	(35.5)	褐色	褐色	ハケメ	ハケメ	-	-		201217-2
31	S X 3	陶器	甕	-	23.5	(15.3)	褐釉	-	-	-	-	-		201217-5
32	S K30	陶器	磁鉢	30.2	12.3	15.2	褐釉	-	-	-	-	-		201217-79
33	S K30	陶器	大鉢	55.9	13.2	18.3	白土化粧・緑釉 褐釉	-	-	松	-	-		201217-83
34	S P24	鉄製品	刀子	(10.5)	2.5	0.8	赤錆色	-	-	-	-	-		201217-81
35	S K30	鉄製品	刀子	(5.7)	1.9	1.4	赤錆色	-	-	-	-	-		201217-82
36	S P 8	銅製品	銭貨	2.0	-	0.1	緑青	-	-	-	-	1.2g		201217-84
37	S P25	銅製品	銭貨	2.4	-	0.1	緑青	-	-	-	-	1.3g		201217-85
38	表様	銅製品	銭貨	2.5	-	0.1	緑青	-	-	-	-	2.4g		201217-87
39	S K30	銅製品	標管吸口	7.3	-	1.0	緑青	-	-	-	-	6.7竹質残存		201217-86
40	S K19	石製品	石臼	29.0	-	8.0	灰色	-	-	-	-	福沢岩		201217-56

IV. 総括

検出された遺構と遺物から本調査区の様相について述べたい。

本調査では 18 世紀前半～明治初期の遺物と、18 世紀後半～明治初期の遺構が検出された。最も古い遺構は、SD28 であり、各遺構に切られている。SD28 から出土した遺物は 18 世紀以降のものである。この溝は、北側の柳川往還とほぼ平行していると見られ、18 世紀当初道幅がもう少し広がったか、もしくは道路の位置がやや南側あった可能性を示している。

次に古い遺構は、SD28 を切っている土坑群である。この土坑群は居住域に伴う廃棄土坑と考えられ、周辺に SB13 以前にも何らかの建物があった可能性も考えられる。この土坑群を切っている遺構は、根石を伴う掘立柱建物 SB13 である。SB13 は柵列状の一本の並びしか検出できなかったが、根石を伴うピットの構造上、柵列ではなく建物であると考えられる。

享保 11 年の田代火事を受けて原古賀町七丁目が形成され、文政年間には出町が存在している。天保年間図にはすでに出町の外側にあたる本調査区の町屋群も形成されており、その西端に溝と寺が設けられて境を成していることから、本調査区は、それまでなんらかの建物が並ぶ地域であったが、原古賀町が南側に拡大するにつれて、19 世紀前半のある時点で SD28 が埋め立てられて道路を狭めるか、もしくは北側に付け替えるかされたのちに、SB13 掘立柱建物を主体とする町屋群が形成されたと考えられる。幕末から明治にかけての遺構としては、SB5、SK19、SK30、SX1、SX2、などが挙げられる。かつての居住者の方のご教示では、明治期から先代が当地で飲食店を営んでいたということであり、これらの遺構はその飲食店に伴うものと考えられる。比較的規模の大きい木造の建物であったそうである。SB5 はその建物の一部を検出したものであろう。SX1 は便槽と考えられる。江戸の町屋の構造を参考にすれば、便槽が町屋の敷地の中ほどにあることは、当地が商店として利用されていたことを裏付けているといえる。また、SX2 や SX3 の埋甕や、石臼(40)は調理に伴う遺構・遺物と考えられる。墨書のある陶磁器(20～25)も飲食店に伴う遺物と考えられる。20、22、23、24、25 に書かれている「原十 赤太」は、貧乏徳利の底部や磁器皿の底部に書かれており、この陶磁器の使用者の名前であると考えられる。一般的に貧乏徳利の側面には、量り売りの酒を供給する酒屋の屋号名が記されており、今回の底部に書かれている文字は、酒屋の屋号名ではなく、酒屋に徳利を持ち寄った利用者を識別するための記号であると考えられる。原古賀町十丁目の赤・某・太・某(郎左衛門?)といった意味であろう。21 に書かれている「原三 木口」は原古賀町三丁目の木某という人名を指していると考えられる。なお、天保 3 年に原古賀町七丁目が原古賀町十丁目に改称されており、この陶磁器に書かれている「原十」は元の原古賀町七丁目地点を意味していると考えられる。本調査区で営まれていた生業が飲食店であったことから、これらの徳利や皿は、この店を利用していた客が、自宅から持ち込んだものである可能性が考えられる。本調査区を含む一帯は、原古賀町が南側へ拡大した結果形成された町であり、一般的な出町の機能を有した町である。近世後期には馬借や旅館、飯屋などが立ち並んでいたと考えられ、今回の調査において飲食店に伴う遺構が検出されたことは、それを裏付けている。

報 告 書 抄 録

ふりがな	くるめじょうかまちいせき		
書 名	久留米城下町遺跡 ―第21次発掘調査報告―		
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書		
シリーズ番号	第329集		
編 著 者 名	江頭 俊介		
編 集 機 関	久留米市 市民文化部 文化財保護課		
所 在 地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15番地3 Tel 0942-30-9225 FAX 0942-30-9715 Email: bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp		
発 行 年 月 日	平成25年(2013) 3月31日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯 ° ′ ″	東 経 ° ′ ″	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
くるめじょうかまちいせき 久留米城下町遺跡 第21次調査	くるめし 久留米市 ほんまち 本町	40203	—	33° 18′ 27″	130° 30′ 20″	20120718 ～20120807	78㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種 別	時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
久留米城下町遺跡 第21次調査	集落	近世	掘立柱建物	2棟	近世陶磁器、鉄製品、 銅製品、石製品、木製 品	原古賀町の南端構口のさらに外側、柳川往還の起点となる町		
			土坑	21基				
			埋蔵	2基				
			漆喰製盤状遺構	1基	ピット			
要 約								
原古賀町の構口の外側、柳川往還の起点となる町屋について調査を行った。19世紀の掘立柱建物や、明治期の飲食店に伴う遺物や遺構が検出された。								
土木工事の届出日		平成24年5月14日			遺物の発見通知日		平成24年8月10日 (24文財第571号)	

久留米城下町遺跡
(原古賀町)

— 第21次発掘調査報告 —

久留米市文化財調査報告書 第329集

平成25年3月31日

発 行	久 留 米 市 教 育 委 員 会
編 集	久留米市 市民文化部 文化財保護課
印 刷	永松印刷
	久留米市中央町20-22